

LINEグループで返信ができないことでネガティブ感情が生じるまでの時間：LINEメール依存度の影響に注目して

宇宿公紀^{*1} 小澤康幸^{*2} 加藤尚吾^{*3} 加藤由樹^{*4}

*1 東京都立瑞穂農芸高等学校 *2 明星大学 *3 東京女子大学 *4 相模女子大学

Negative emotions arising with inability to reply quickly in LINE group communication: Focusing on the LINE text-messaging dependency

Kiminori Usuki^{*1}, Yasuyuki Ozawa^{*2}, Shogo Kato^{*3}, Yuuki Kato^{*4}

*1 Tokyo Metropolitan Mizuho Nougei High School, *2 Meisei University

*3 Tokyo Woman's Christian University, *4 Sagami Women's University

LINE グループで他のメンバーが送信したメッセージに対して返信ができずに送信者らを待たせている状況において、待たせている側のメンバーに不安と罪悪感が生じるまでの時間を調べた。なお、未読/既読状態、LINE グループの種類、LINE メールへの依存度との関連にも着目した。主な結果としては、意識して作られたグループにおいて、LINE への依存の影響が大きく、依存度の高い人の方が不安、罪悪感をより短い時間で生じさせることがわかった。

キーワード：スマートフォン、LINE アプリケーション、SNS、LINE メール依存、大学生

1. はじめに

LINEとは、音声電話やメールを通して個人・グループ単位でのやり取りができるアプリである。グループ単位のメールでは、返信ができないことで、グループに所属する他の者を待たせる場合がある。加藤ほか(2018)は、LINEグループで返信を待たせる場合にネガティブ感情が生じると述べている⁽¹⁾。また、そこで生じるネガティブ感情には、LINEメール依存が影響していると考えられる^(2, 3, 4)。そこで、本研究では、LINEグループにおいて返信をできない状態がどのぐらい続くと受信者にネガティブ感情が生じるのかを、LINEメール依存度の影響に着目して分析した。

2. 方法

2017年11月に首都圏の女子大学の学生183名(平均年齢20.27歳(標準偏差1.17))を対象に質問紙調査を行った。なお、調査対象者はLINEを普段から利用しており、LINEの友だち数の中央値は150人、LINEのグループ数の中央値は33グループであった。

質問紙は、フェイスシート、LINE依存度を測定する尺度に加えて、筆者らが設定した5種類のLINEグループ(家族G、恋愛G、友人G、ゼミG、年上G)に、調査対象者以外のメンバーが休日の正午に、意見や回答等の返信を求めるメッセージを送信したときに、調査対象者が返信をせずに未読状態を続けていること、返信をせずに既読状態を続けていることで、調査対象者に「不安」、「罪悪感」が生じ始めるタイミングを回答してもらった。「不安」と「罪悪感」が生じるタイミングは、1時間刻みで25段階(当日の13時から翌日の13時まで)及び「翌日の13時よりも後」、「生じない」の全27の選択肢から回答を求めた。したがって、「不安」と「罪悪感」の生じるタイミングの選択肢は一部等間隔ではない。しかし、分散分析の利便性を優先し、この27段階をそのままタイミング得点、すなわち当日の13時を1点とし、生じないを27点として分析に用いた。

LINEメール依存度の測定には、「携帯メール依存尺度(短縮版)」⁽⁵⁾を用いた。この尺度の各質問項目では

コミュニケーションツールが「メール」になっているが、本調査ではこれらを LINE に置き換えた。この尺度は「情動的な反応」、「過剰な利用」、「脱対人コミュニケーション」の3つの下位尺度から構成され、各下位尺度で5項目があり、それぞれ5段階評定(1: 全くあてはまらない ~ 5: 非常にあてはまる)で回答を求める形式であった。

3. 結果と考察

LINEメール依存度による分類は、調査対象者ごとに各下位尺度の得点の平均値を計算し、これら3つの値を変数としたTwo step cluster analysisをSPSS 24を使って行った。その結果、調査対象者は2つのクラスターに分けられた。表1に、2つのクラスターの各下位尺度の平均値及び、それらの平均値を下位尺度ごとにクラスター間で比較した結果を示す。表1に基づいて、クラスター1 ($n=110$) を依存高群、クラスター2 ($n=73$) を依存低群とした。

分析は、「不安」と「罪悪感」の感情それぞれにおけるタイミング得点に関して、状態(既読, 未読) × グループタイプ(家族G, 恋愛G, 友人G, ゼミG, 年上G) × LINEメール依存度(依存高群, 依存低群)の三要因分散分析を行った。LINEメール依存度, 状態, グループごとに「不安」のタイミング得点を図1, 「罪悪感」のタイミング得点を図2にまとめた。

「不安」のタイミング得点に関するLINEメール依存度, グループタイプ, 状態の主効果を検討した。その結果, LINEメール依存度 ($F(1, 179) = 3.96, p < .05$) とグループタイプ ($F(4, 716) = 10.99, p < .001$) には主効果が認められたが, 状態には認められなかった。

また, LINEメール依存度 × グループタイプ ($F(4, 716) = 2.52, p < .05$), LINEメール依存度 × 状態 ($F(1, 179) = 3.22, p = .07$), グループ × 状態 ($F(4, 716) = 3.81, p < .01$) において交互作用が認められた。下位検定を行った結果に示された傾向の一部を以下に述べる。

グループタイプごとのLINEメール依存度間の単純主効果の検定を検討した結果, 依存低群と比較して依存高群の方が, 家族G ($p < .01$), 恋愛G ($p < .05$), 友人G ($p < .05$) において, 有意にタイミング得点が低い。つまり, 短い時間で「不安」が生じる傾向が認められた。「自動的」にグループを作られるわけではな

い家族G, 恋愛G, 友人Gは, 所属先のメンバーがそのままグループのメンバーにもなるような, “自動的”に作られるグループであるゼミGや年上G(サークルの先輩やアルバイトの上司が含まれるグループ)よりも親密度が高いと考えられる。このことから, LINEメール依存高群は, 親密度が高いグループにおいて, より早く「不安」が生じやすいといえる。

LINEメール依存度ごとの状態間の単純主効果を検討した結果, 未読と比較し既読の方が, 依存低群 ($p = .07$) において, 有意に短い時間で「不安」が生じる傾向が認められた。すなわち依存低群の方が, より未読/既読状態の違いを意識するのかもしれない。

「罪悪感」のタイミング得点に関するLINEメール依存度, グループタイプ, 状態の主効果を検討した結果, LINEメール依存度 ($F(1, 179) = 2.82, p = .10$), グループタイプ ($F(4, 716) = 13.79, p < .001$), 状態 ($F(1, 179) = 5.57, p < .05$) の全てにおいて有意な差が認められた。また, LINEメール依存度 × グループタイプ ($F(4, 716) = 4.73, p < .001$), LINEメール依存度 × 状態 ($F(1, 179) = 5.72, p < .05$), グループ × 状態 ($F(4, 716) = 3.43, p < .01$) において交互作用が認められた。下位検定を行った結果に示された傾向の一部を以下に述べる。

グループタイプごとのLINEメール依存度間の単純主効果を検討した結果, 依存低群と比較して高群の方が, 家族G ($p < .05$), 恋愛G ($p < .05$), 友人G ($p < .01$) において, 有意にタイミング得点が低い。つまり, 短い時間で「罪悪感」が生じる傾向が認められた。これは, 「不安」の結果と一致する。

LINEメール依存度ごとの状態間の単純主効果を検討した結果, 未読と比較して既読の方が, 依存低群 ($p < .01$) において有意に短い時間で「罪悪感」が生じる傾向が認められた。これも「不安」の結果と一致する。

表1 クラスターごとの各下位尺度の得点の平均値

	情動的な 反応	過剰な 利用	脱対人 コミュニケーション
クラスター1	3.10 (0.71)	3.21 (0.77)	2.55 (0.64)
クラスター2	1.82 (0.54)	2.47 (0.86)	1.56 (0.42)
<i>p</i>	***	***	***

()内は標準偏差。 $p = t$ 検定の有意確率, *** $p < 0.001$.

4. まとめと今後の課題

LINEグループで返信ができないことでネガティブ感情が生じるまでの時間をLINEメール依存度と併せて検討したところ、家族、恋愛、友人という意識して作るグループにおいて、LINEへの依存の影響が大きく、依存度の高い人の方が不安、罪悪感をより短い時間で生じることがわかった。

今後の課題としては、LINEメール依存とグループとの関係性の詳細な分析などが挙げられる。

本研究は、科研費18K02871、18K02912の助成を受けて実施しました。感謝致します。

参考文献

- (1) 加藤尚吾, 小澤康幸, 加藤由樹, 宇宿公紀 : LINE グループにおいて返信を待たせる側のメンバーにネガティブ感情が生じる比率 : グループの種類及びLINEへの依存の影響. 情報コミュニケーション学会第15回全国大会発表論文集, pp.66-69 (2018)
- (2) 加藤由樹, 加藤尚吾, 小澤康幸: LINEメールにおいて相手からの返信がなかなか届かない時に生じる感情 : 未読状態/既読状態及びLINE依存度の影響. 情報コミュニケーション学会第15回全国大会発表論文集, pp.74-77 (2018)
- (3) 加藤由樹, 加藤尚吾, 小澤康幸: LINEにおいて4種類のネガティブ感情が生じる時間 ~ 返信の待ち時間に関する LINE メール依存度による比較 ~. 教育システム情報学会研究報告, 32(5), pp.151-153 (2018)
- (4) Kato, S., Kato, Y., & Ozawa, Y. : Reply speed as nonverbal cue in text messaging with a read receipt display function: Effects of messaging dependency on times until negative emotions occur while waiting for a reply. International Journal of Technology and Human Interaction. (in press)
- (5) Igarashi, T., Motoyoshi, T., Takai, J., & Yoshida, T. : No mobile, no life: self-perception and text-message dependency among Japanese high school students. Computers in Human Behavior, 24(5), pp.2311-2324 (2008)

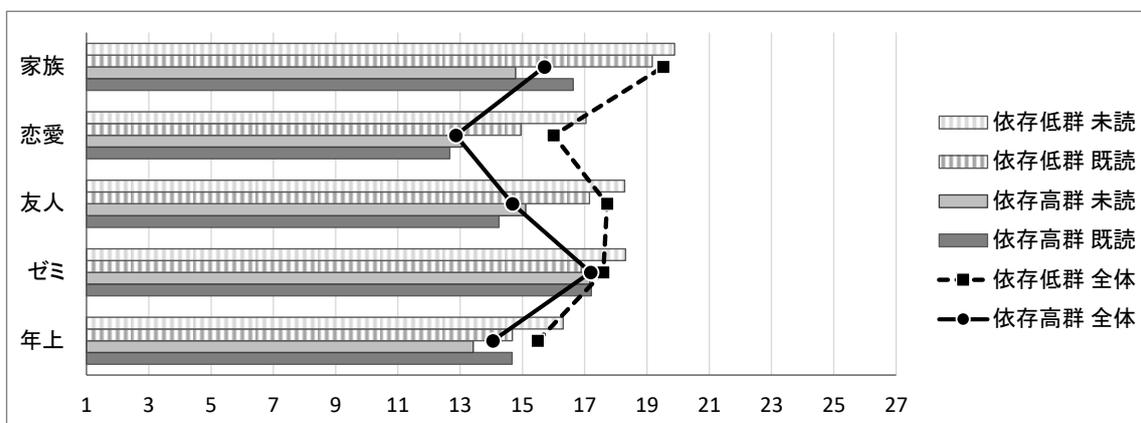


図1 項目ごとの「不安」が生じるタイミング得点

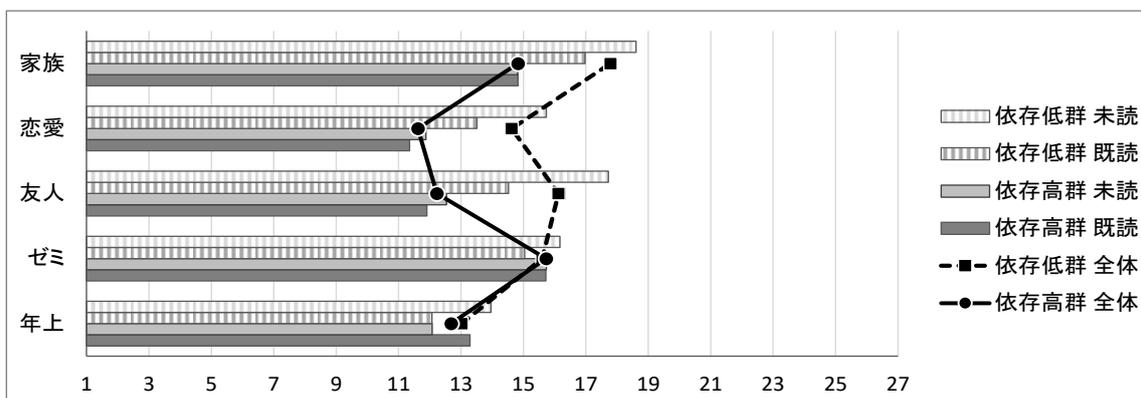


図2 項目ごとの「罪悪感」が生じるタイミング得点